



富田学長は、開会のあいさつで、発表者のアイデアやさらなる行動への新たな取り組みは、とても誇らしく、ワクワクするものだと思いを語りました。今回のコンテストで、自らの経験を共有し、新しい視点を提供しあうことが、共通の目標に向かう次のステップにつながると発表者にエールを送りました。



司会を務めた常磐大学人間科学部コミュニケーション学科 4 年の高橋百合菜さん (右)、同学科 3 年の宇佐美歩渚さん (左)。終始、笑顔で発表者を和ませつつ、スムーズな進行をしてくださいました。

フェレール ヨシさん (茨城県立坂東清風高等学校 1 年)
"Establish a Mega Farm to Stop World Hunger"



フィリピンの小さな町で育ち、夏休みに街でホームレスや子どもの飢餓に直面したことがきっかけで、将来、持続可能な大規模農場を設立し、食糧を必要としている人々に食糧を配給することを夢見ていると語ってくれました。

はなわ あいり
 埜 愛理さん (茨城県立緑岡高等学校 2 年)
"Sustainable Solutions for Swimming Pools"



従来のプールの使い方を見直し、資源の消費を最小限に抑える別の方法を模索すること、そして、使用されなくなったプールを再利用することを提案してくれました。また、水着のリサイクルを目的とした「RENU」プロジェクトにも注目していました。

ほしの そうた
 星野 壮汰さん (愛媛県立松山中央高等学校 2 年)
"Let's Think about the Micro Plastic Problem"



自身がゴール 14 に興味を持ったのは、2 つの経験から。一つは、ビーチのプラスチックゴミで足を怪我したこと、もう一つは、幼少期に海辺で暮らし、水路やビーチをきれいにするイベントに参加したこと。「シービン」と呼ばれる新技術に注目し、海を自然の状態に戻したいと語ってくれました。

こいで しおり
 小出 詩祈さん (和洋国府台女子高等学校 2 年)
"The Journey to an Inclusive Society"



すべての人に公平でインクルーシブな教育を保障することは、ゴール 4 の解決に向けた重要な一歩だと考え、将来は教育関係の仕事に就き、日本の小学校で包括的な多文化教育カリキュラムの開発に尽力したいと夢を語ってくれました。

ますだ あやと
増田 絢斗さん (茨城県立日立第一高等学校1年)

“The Release of Fukushima's Tritium Water: Safe or Not?”

審査員特別賞



日本政府が、福島原発事故の「汚染水」の一部を海に放出することを決定したことで、校内アンケートを実施。今回の決定に、日本政府が非常に責任感を持って、必要な安全対策を講じているとの自らの考えを述べました。

おがわ のん
小川 暖さん (土浦日本大学中等教育学校4年)

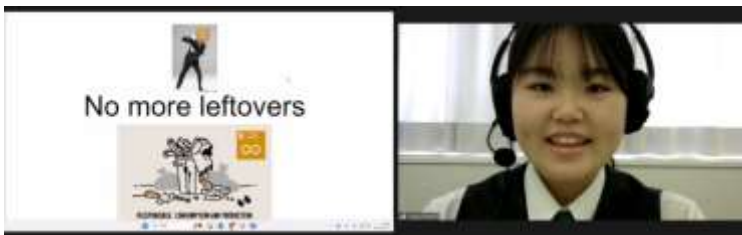
“Advocating for SDG 5 for Japanese Women”



男女平等の重要性や働く母親の支援について、学校教育の中で取り上げたり、支援団体をサポートすることで、すべての女性がキャリアと家庭生活の両方で活躍できる社会の実現につながるのではと語ってくれました。

おおとも ゆうか
大友 佑夏さん (常磐大学高等学校1年)

“No More Leftovers”



食品ロスや飢餓の問題の解決に向け、賞味期限や消費期限を切っ捨てて捨てることを減らすこと、また、家庭で余った食材や調味料をフードバンクに寄付することを提案してくれました。誰もが食べる喜びを感じられる世の中になることを願って。

せきぐち おうすけ
関口 旺佑さん (啓明学院高等学校3年)

“Prevent Overworking – Living with AI”

3位



小学生の頃、マレーシアへボランティアに行き、お年寄りや子どもも毎日で働く姿を見て、過重労働について考えるようになり、思いついたのが、「仕事量可視化計算システム」(WVGS)。AIを使うことで、業務の効率化、コスト削減、従業員や取引先の満足度向上が実現できることを願っていると語ってくれました。

しみず みはる
清水 美陽さん (渋谷教育学園幕張高等学校2年)

“A Modern Education Reinvention”

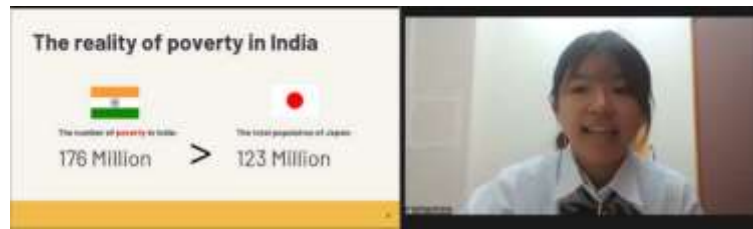
1位



日本の教育の型にはまらず、自分の居場所がないと感じている人はたくさんいて、解決策となりうるのは、AIだと提案してくれました。世界中の学生や教育者が、自らの実体験に基づき、ハブにデータを入力し蓄積することで、生徒が対面で従来の学校と同じような教育を受けられる新しい統合システムができるのではと、自らの考えを語ってくれました。

つじもと あ
辻元 逢めりさん (同志社国際高等学校2年)

“Insights from India's Landscape”



7年間インドに滞在し、貧困の実態を見たことで、同じ目標を持つ仲間とチームを結成し、NGOの協力も得て、日本人とインド人学生のコミュニケーションと教育を促進する概念実証アプリを開発し、日本とインドのメンバーが参加するトライアルを実施。オンライン会話セッションの開催など、語学教育や技術教育に力を入れていきたいとの思いを語ってくれました。

うえじま とわ
上島 士和さん (開成高等学校3年)
“Dreams Have Colors”



高校時代にカンボジアでボランティア英語教師をしたことがきっかけで、ケニア難民の子どもたちとボランティア活動をしたり、学生団体を立ち上げたりと、一連の取り組みを始めたことを紹介してくれました。すべての子どもに夢を見る資格があり、教育を受ける機会があることを知ってほしいと語ってくれました。

Overall Comments



最後に、審査員を代表して、人間科学部ケビン・マクマナス准教授による総評がありました。発表者全員が、このプレゼンテーションに十分な時間、労力、思いを注いでくれたことに対する賛辞が贈られました。このコンテストが、急を要するSDGsの課題解決に向けて、仲間や友人と考えを共有し、活動することの大切さを認識する、大きな一歩となったと締めくくりました。

Special Presentations from Exchange Students



審査時間を利用して、本学協定校（アメリカ、カナダ、ポーランド、タイ、台湾、モンゴル）からの15名の交換留学生、およびウクライナからの避難民学生による発表が行われました。それぞれの国や大学について、日本語で一生懸命に紹介してくれました。

